ベンガラを全国へ流通させた鍾乳洞の隧道

羽山（はやま）第一・第二隧道

吹屋（ふきや）（現・高梁市成羽（なりわ）町吹屋）銅山の開坑は大同２年（804）といわれていますが、天和元年（1681）に大坂の泉屋が吉岡銅山を開発し、18 世紀初め頃から銅山を中心とする鉱山の町になります。その後、吹屋は幕末から明治時代にかけて、銅鉱とともに硫化鉄鉱石を酸化・還元させて人造的に製造したベンガラ（酸化第二鉄）の日本唯一の巨大産地として繁栄を極めます。主に美術工芸用の磁器の絵付け・漆器、神社仏閣の外壁塗装に多用されたベンガラの搬出、そして吹屋で消費する精錬用の薪炭や食料の搬入に吹屋往来は人馬の往来が絶えなかったそうです。

成羽を起点として吹屋経由で東城（広島県庄原市）へ続く道、一方吹屋から新見に至る道を吹屋往来という場合がありますが、いずれにしても備中北部や備後奴可郡に産出する鉄の搬出ルートとして古くから開発された道だったようです。成羽から羽山の集落を通って吹屋に向かう道は、尾根伝いに開かれた急坂の多いルートでした。これを近代車両交通道路にするため大正３年（19149）に島木川沿いの「県道　宇治下原線」（県道 300 号線）の建設に着工しましたが、難工事で昭和４年（1929）にようやく開通しています。

特に島木川の上流約 4㎞付近の羽山渓谷は石灰岩地帯で、なかでも難工事だったのが、羽山第一隧道（L=73m）と第二隧道（L=32m）でした。『岡山県の近代化遺産』（岡山県　平成 17 年）によれば、人を吊るして鑿で削っていたとのことで、人海戦術で工事は進められたようです。

この隧道の特徴は鍾乳洞兼用隧道ということで、北側（上流側）の坑口は鍾乳洞の一部で、石灰岩の岩壁のふもとに川が穿った穴に県道が潜り込み、そのままトンネルへと続いています。隧道の入り口と連続している鍾乳洞は、入口はかがんで入らなければいけないほど低くなっていますが、すぐに立ってあるけるようになり、約 15 mで行き止まりとなっています。

現在は「かぐら街道」等が開通し、県道宇治下原線の交通量は減少傾向だそうですが、成羽川との合流点までに数台は離合したようでした。

■位置図

羽山第一隧道

羽山第一隧道内部

上流側の坑口が鍾乳洞の一部である羽山第二隧道

内部から見る羽山第二隧道